新潟県における慣行田植作業の地域性と その成立要因に関する研究

第4報 佐渡地区について*

進藤 隆**

Studies on the Traditional Transplanting Methods of Rice
in Niigata Prefecture.

IV On the Case of Sado Island

Takashi SHINDO[†]

著者は第1^{6),7)}～3報で新潟県下を上, 中, 下越に三分して各地域の慣行田植作業の植付基準作成用具の分布, 変遷, 苗取り, 苗運搬および植付作業についてその地域性, 成立要因について報告したがこの中には佐渡は含まれなかった。

佐渡については一島一群で古来より一つの文化圏を形成しているので必ずしも内陸部と同一ではない。そこで本報ではこの独立した一地域内の慣行田植作業の成立要因が自然的ならびに社会, 経済的諸条件といかに関連しているかを究明しようとしたものである。

調査方法

本調査は1976～77年の2か年間にわたって実施した。調査方法は①概ね50才以上の農民を対象として慣行田植作業方法についての詳細な現地での聴取り調査, ②博物館, 資料館などを利用した文献, 資料などの調査, ③写真撮影, ④自動車で行中からの概観などをもってこれ補う, 以上の方法によった。

調査地は国仲平野の金井町大和, 真野町金丸, 新穂町舟下, 海岸地帯の羽茂町小泊, 羽茂町羽茂本郷, 小木町矢島, 小木町強清水, 赤泊村柳沢, 畑野町松崎の9地点を中心にその他数ヶ所を合せて現地調査を実施した。

調査結果および考察

1) 佐渡の概況

佐渡の全面積¹⁾は857.19km², そのうち耕地面積13,000haで水田は11,000haである。

水田分布は大部分が国仲平野を中心とし, 他は各地に小面積で点在している。また地域区分を稲作の面からみると国仲平野地帯と佐渡海岸地帯とに二大別できる。

国仲平野地帯は国府川からの沖積層の埴質土が大部分を占め地力が高いのに対し佐渡海岸地帯は大半が丘陵の棚田で, 土地条件は良くない。海岸周辺のため潮害を受けやすく, 天水田, 小河川による用水田が多いので, 早害も受けやすい⁴⁾。

2) 本田準備作業

耕起, 砕土作業は時期, 用具, 方法などの点において県下他地域と大きな地域差は確認できなかった。均平作業は国仲平野ではゴロ(ゴロタ, 第1, 2図)が多く用いられ, 佐渡海岸地帯は小区画不整形水田が多いためイブリが使用されている。この相違は用具の運搬, 使用上の難易, およびほ場条件などによる。

* 昭和53年4月4日受理 第12回講演会発表

** 新潟県立興農館高等学校, 新潟県西蒲原郡巻町 〒953

† Niigata Pref. Konokan Senior High School, Maki-machi, Nishikanbara-Gun, Niigata 953

80本)にする片手小口取法が行なわれている。

第1図 均平用具 (ゴロ)

注) 佐渡郡金井町で撮影

第3図 苗取り (片手取り法)

注 佐渡郡羽茂町小泊で撮影

第2図 均平作業

注 佐渡郡金井町で撮影

3) 苗取り作業

(1) 苗取り法

苗取りは国仲平野を中心とする平野部では作業者は中腰で作業は肩巾程度に広げた両手を交互に動かして小指、薬指、中指などで苗を少しずつ根元から抜取り、人さし指、親指でこれを保持し一握り位になったとき両方の苗を寄せて2握りを一束(80~120本)とし、水面に軽くたたきようにして泥土や狭雑物を洗い落とし結束する両手小口取法である。これに対し佐渡海岸地帯では片手の小指、薬指、中指などで苗を少しずつ根元から抜取り、人さし指、親指でこれを保持し一握り位になったら水面にかかるくたたきようにして泥土や狭雑物を落してからもう一方の手に持ち変え(第3図)、さらにもう一回片手で苗取りを繰返し2握り一束(70~

佐渡海岸地帯で片手小口取法が多く行なわれている理由は①用水不足の地域が多く両手小口取法での苗束の根洗に必要な用水確保に時間がかかりすぎる。②国仲平野より農家一戸当りの耕作面積が少ないため少しでも作業の楽な方法がとられた。③種籾生産地(羽茂町小泊)では健苗確保のため条播、薄播となり両手小口取法が不向であることなどが考えられる。

(2) 苗取り時の腰掛

島内で苗取り時腰掛を使用することはごく一部の高令者に限られている。この理由は①作業中腰掛を使用することにより移動などに時間を要し作業能率が低下する、②経営水田面積が小さいため苗取り、植付作業を適度に繰返すので腰掛を必ずしも必要としない、などが主な理由と考えられる。

(3) 苗の結束方法

結束の方法は第4図のとおりで全国的にみられる普通の結束法と同じである。

結束材料は稲わらに限られ、乾燥した稲わらの葉鞘部を取除いたすぐりわらを木づちで打ち柔軟にし長さ50~60cm位に穂先の部分を切断してあるものに限られる。1束1~3本使用している。

第4図 苗の結束法

(4) 苗取りの作業時間

苗取り作業時間は地域や経営規模あるいは作業者の年齢構成などによって種々の工夫がなされており一定の傾向がみとめられない。

たとえば国仲平野を中心とし海岸地帯の一部では第5図に示すとおり当日早朝（A.M.5.30ころ）から午前8時ころまで作業者全員で苗取

調査地	作業時間
金井町	<p>前日午後 苗取</p> <p>当日 A.M.6.00 植付作業 P.M.4.00 苗取作業</p>
真野町 羽茂町 赤泊町 畑野町	<p>A.M.5.30 7.00~8.00 P.M.6.00</p> <p>苗取り作業 植付作業</p> <p>苗取り作業（比較的高齢者）</p> <p>P.M.5.00</p>
羽茂町 小木町	<p>A.M.6.00 8.00 12.00 P.M.2.00~2.30 P.M.6.30</p> <p>苗取り作業 植付作業 苗取り作業 植付作業</p>

第5図 田植の作業時間帯

りを行ない、小休止後作業者のうち比較的高令者は苗取り、他の作業者は植付作業に移る。また「結（ゆい）」、「雇用」などで植付当日多くの労働力を導入できるときは植付前日自家労働力を中心に苗取りを行ない翌日は共同または雇用の労働力を導入して早朝より植付作業に当り、なお不足する苗は当日作業者のうち比較的高令者が採苗に当る。

一方、海岸地帯では午前、午後の各前半苗取り、後半植付作業を繰返しているところが多い。このような作業配当を行なう原因は立地上苗代、本田が分散していて同一作業を長時間継続することが困難である点が考えられる。

(5) 苗取り作業の組織

1960年頃までは田植労働力の確保は「結」や「手間替」に大半を頼っていたが、その後の農村における労働力の減少で自家労働力および雇用労働力を主とするようになった。

国仲平野では自家労働力を中心として、不足分は賃金雇用の労働力で補う。海岸地帯は自家労働力を主として、不足分はわずかの「結」で補充している。海岸地帯で現在でも「結」が行なわれている要因は労働力の相互補充によってようやく地区の農作業が成立するためと考えられる。また羽茂町小泊地区のように生産組織が確立しており計画的な共同作業が行なわれているところもある。

3) 苗の運搬

(1) 運搬の担当者

苗運搬は第1表に示すとおり男で一般には当該農家の経営主であることが多い。これは県内各地と同様当該農家の経営内容を知悉している必要性からと考えられる。

	男	女
金井町	型付け、苗運搬、水管理	苗取り、植付け
真野町	型付け、苗運搬、水管理	苗取り、植付け
羽茂町	型付け、苗運搬、水管理	苗取り、植付け
小木町	苗取り、苗運搬、田植縄準備	苗取り、田植縄準備
赤泊村	型付け、苗運搬、水管理	苗取り、植付け
畑野町	型付け、苗運搬、水管理	苗取り、植付け

第1表 田植時の男女の主たる作業分担

(2) 運搬方法

運搬方法は県内各地で行なわれていると同じく採苗された苗束を苗代の水面に浮かせておくが、搬出はその苗束を両手で10~20束ずつ畦畔まで寄せ、数束ずつ持ち上げて水を切り、畦畔上に置いてある竹籠、カマス（第6図）、炭俵、木箱などに入れる。

また国仲平野の一部では比較的小区画の大きな苗代においては、苗束を小舟に100束程度積込畦畔まで運搬している。

国仲平野は、苗代の畦畔まで運搬された苗束を1960年頃まではリヤカー、耕うん機などその地域や経営規模に適応した利用方法がとら

第 6 図 苗の運搬 (カマス利用)

注 両津市で撮影

れていたが、その後しだいに自動車の利用が多くなった。この場合運搬車への積み込みには竹籠、木箱 (リング箱)、カマス、炭俵などを用いている。

また海岸地帯でも 1960 年頃までは天秤、手さげ、一輪車などが多く利用された。その後農道の整備が進むにつれて自動車の利用が多くなった。

3) 苗の日除け

国仲平野、海岸地帯ともに運搬容器の上にむしろ、こも、野草などを利用して日除けを行なう、これは作業中および運搬中の萎凋防止のためである。

4) 植付作業

(1) 植付基準作成用具の地域性

島内で使用される植付基準作成用具は第 2 表のとおり田植杵〔六角杵 (第 7 図)、四角杵〕、田植縄 (縦縄) の 2 種類である。

植付基準作成用具の地域性は第 8 図のとおり国仲平野や海岸地帯の一部では田植杵が利用されるが、これらはほ場条件特に区画、水利条件などが田植杵に適応しているためである。一方、小木半島では水利条件がきわめて悪いので用水を有効に利用するため田植縄 (第 9 図) を使用する。

(2) 配苗法

植付基準作成用具やほ場条件に左右されることなく、島全域で各人が竹製の腰籠 (第 10 図) に必要な苗束を入れて植付作業を行なう。

第 7 図 田植杵 (六角杵)

注 1) この六角杵は並木植用

2) 佐渡郡羽茂町小泊で撮影

第 8 図 植付基準作成用具の地域性

〔I〕 田植杵を主として使用する地域—国仲平野

〔II〕 主として田植縄 (縦縄) を使用する地域
—小木半島

第 9 図 田植縄 (縦縄) による植付

注 佐渡郡小木町強清水で撮影

第10図 苗籠（腰籠）

注）両津市で撮影

(3) 植付株数

作業員1人当りの持株数は田植杵で5株が一般的であるが、ごく一部で疎植を行なう場合に4株である。田植縄（縦縄）は6株である。

(4) 植付時の作業員の歩行方向

作業員の移動方向は植付用具と密接な関係があり田植杵を使用する地域は前進法がとられ植付は左右往復植である。つぎに田植縄（縦縄）では後退法がとられ植付は左右往復植である。

(5) 植付基準作成用具の変遷

国仲平野、海岸地帯とも当初は後退法による乱雑植であった。その後1890年佐渡三郡連合会で先進地から水稻、陸稻の指導者を2名招き指導を受けることになり、1892年には郡内各地に農事試験場が増設され巡回指導が行なわれ、講習科目には牛馬耕のほか塩水選、正条植、短冊苗代など多くの技術指導が実施されたが1894年日清戦争の勃発とともに縮少された。³⁾このように佐渡における正条植の普及は農商務省の指導よりも早くかつ組織的に行なわれていたようである。

また金井町（旧吉井村）では1897年ころに「引き杵」や「定規」が入ってきたが一般には普及しなかった。その後化学肥料の使用が普及するにつれて正条植した稲は比較的病虫害にかかりにくく、収量が安定することが認識され

1905年に村も大いに奨励したといわれる。²⁾

さらに新穂村舟下では1913年ころまでは後退法の乱雑植であった。1913年に耕地整理が行なわれてから正条植は普及した。1913～1917年には27cmまたは30cm間隔に有印された田植縄（縦縄）で後退法による5株であった。しかし縄は腐りやすいことにより一時期針金が使用された。また同時期に楕円田植定規も使用されたが①作業能率が上がらない、②作業中の用具の移動の繁雑さなどからすぐに使用されなくなった。その後田植杵（六角杵）が導入され現在でも使用されている。これは田植杵が①他の用具に比べ作業能率が向上した。②他の用具に比べ密植が可能になり増収した。③用水が少しくらい（10cm程度）あっても作業が可能などの要因からと思われる。

一方、小木半島では水利条件がきわめて悪くかつ用具の運搬も困難な条件から、それにもっとも適応する用具として田植縄（縦縄）が現在でも使用されている。

以上が佐渡での植付基準作成用具の変遷であるが、この用具変遷の要因としては①用具取扱の難易、②ほ場条件への適応程度、③収量への影響の3点が考えられる。

以上佐渡地区の調査結果はごく一部の作業を除いて既調査地（上越、中越、下越）と比較して明らかに地域差が認められた。これら相異の認められた個々の作業の成立要因についてはまだ不明な点も多く、それらの究明については今後の調査にまたなければならない。

参考文献

- 1) 北陸農政局新潟統計情報事務所：新潟農林水産統計年報（農林編）昭和51～52年
- 2) 金井町史編纂委員会：（1967）金井町史 近代編P111、金井町教育委員会
- 3) 北見順蔵・石井治作：（1951）佐渡牛馬耕発達誌P2、金沢村農業協同組合
- 4) 新潟県農林部：（1974）新潟の米百年史P56
- 5) 新穂村史編纂委員会：（1976）新穂村史P630～633、新穂村
- 6) 進藤隆：（1975）新潟県における慣行

田植作業の地域性とその成立要因に関する研究
第1報植付用具について, 農作業研究 23, P.11~
16

7) 進藤隆:(1976)新潟県における慣行
田植作業の地域性とその成立要因に関する研究
第2報苗取り, 苗運搬および植付作業について,

農作業研究 27, P.8-13

8) 進藤隆:(1977)新潟県における慣行
田植作業の地域性とその成立要因に関する研究
第3報植付基準作成用具の変遷について, 農作
業研究 30, P.15-19